

## ⑮回目東京キングダムセミナー20231209

賛美：12：44：49

さあ、午後のまだ元気なうちに今日は、前回の続きを、前半と後半と、みっちりやります。(笑)  
 セミナー本で言うならば、パート3「神の国」と「再臨の教え」というところを、やって来ました。それで、これまで、何回かこの本を読んできたんですけど、比較的このパート3を、駆け足で過ぎていました。この「再臨」という事と繋がっていくと、少々、あれもこれもとなっていくので、出来るだけ私としては、「調べたい人は、自分で調べて」というような感じでやって来たんですけど、今回は、マタイの13章の神の国のたとえを前回じっくりやりました。

それで、その後、「神の国」のイエス様のたとえを、丁寧に追っていくと、現在、私達が、聞いて来た「再臨の教え、終末論というものと、どうなのよ、その辺は。」というね・・・、「終末論」と聞けば、「間もなく患難時代が来るぞ」とか「空中再臨、携挙があるぞ」とか、「地上再臨があるぞ」「千年王国があるぞ」というような話を私たちは、これまで結構聞いてきたと思います。そうですね。ハイ。それらが全部間違っていると言っているのではないですよ。そのように聖書を読めば、そのように確かに聖書に書いてあるということなんですけど、・・・けど、神の国というものを、慎重にたどっていくと、前回言ったような、たとえの読み解き方になるわけです。00：16：00：84

そこで、今日は、もうちょっとそこに入り込んで、それで、もう一度、「神の国とは」と、いうところをズームアップして、我々の身近なものに、分かるように、進みたいと思います。

セミナー本の85ページを見て下さい。「再臨に使われている5つの言葉」というところを読みます。

まず、お知らせしなければならないのは、「再臨」について使われる原典の単位の種類です。ジョン・ロバート・ステーブンスは、その著書「キリストの再臨」において、このギリシャ語の分析から始めています。彼の啓示的示唆に基づいて私が調べたことを加え、これからの学びと黙想のために慎重に紹介したいと思います。彼の著書が将来日本語で出版されることを待ち望んでいますが、私達はそれに先立って、神の生きたみことばとなっていこうではありませんか。

↑これって、私がまだ20代の時の話なんです。なので、「キリストの再臨」「終末論」のあるべき内容は、私も聞いて来ましたけど、やっぱり、人からああ聞く、こう聞く、じゃあなくて、聖書の中から自分がそれを、どう見分けるか、そうですね。みんなそうですね。これ、不服無いですよね。だから、私もそういうふうに関心してきたわけです。

それで、新約聖書の中には、キリストが再来することが書かれている32の聖句がありますが、日本語聖書では、この32箇所と同じ単語ではなく、いくつかの言葉が使われています。(←これは、いっぱいいろんな訳を読んだ人が言っている)「再臨」「来臨」「到来」「来る」「現れる」「輝き」などです。日本語で読んでいる限りにおいて、これだけの言葉が32回のうちに使われていても、聖句を読んだ時には、すべて同じ「一瞬のうちにイエス・キリストが再び来る」という意味内容で受け取ってしまうのです。

↑これは、既成概念です。で、ここで、「うん？なんでいろんな言葉が、日本語で違うのだろうか。」と、思って良いわけなんです。日本語の訳が、これだけ色々あるということは、「もともとの古典ギリシャ語で違う言葉なんだな」というのは、

## ⑮回目東京キングダムセミナー20231209

分かりますよね。そこは、訳する人が、勝手に文学表現として、この方が粋だろうと言って、「再臨」と言ってみたり、「来臨」と言ってみたりしているんじゃないわけですよ。だけど、ただ読んでいる人は、「文学的いろんな表現なんだな」という感じに受け取ることが多いよね。

そこで、次のページに5つ、ギリシャ語が書かれています。

——この辺のことを言い出すとね、初めの頃のイエスの信仰を云々というところもそうですけれど、昔だったら、「もう、いいですよ。学校じゃあないんだから、そんな難しいことを・・・」と言われちゃって、私、ガッカリだったんですけど、現在では、皆さん、かみついてこられますよ。聞いて下さることが、増えて来たんです。この時代の違いを感じます。ヘブル語なんか習わなくていいと言っているのに、・・・、ねえ、ほんとそうだよ。(笑) それでも学びたいという人が出てくるという、時代を感じます。——21:12:21

そこで、ここに5つの言葉を掲げています。(P85～)

↑これらの言葉があるんだけど、・・・「同じ様に来るんだから、「来る」で良いでしょう」と言って、十把一絡げに、考えることも、やっちゃえば出来るんだけど、・・・これね、私も若いころから1個、1個、調べたんです。皆さんもどうぞ、調べることが出来たら、調べてみて下さい。分厚い辞書が、2、3冊あればできますから、・・・でも、ちょっとそれを買って、家の置き場所に困りますけれどね。(笑) でも、その一つ、

P86、一番最初に掲げているのが、

【1】《パルーシア》「臨在」です。32回のうち、もっとも多い17回が「パルーシア」です。(←このパルーシアの内容が大切なんです。)これは厳密な意味では、「臨在」「存在」「居ること」「出席」などです。元来「パルーシア」は、皇帝・王・総督などが町や州への到着と滞在を指す言葉でした。王の訪問に対して、町は準備万端を整えることが要求されました。王に冠を捧げるために税金が課せられ、王の滞在のための穀物が集められたのです。注目すべきことは、パルーシアの焦点が王の到着の一瞬ではなく、王の「滞在の期間」にあったということです。←ここ、ポイントです

何よりも準備と装備、王の臨席への気遣いのすべてを、王の滞在の期間、維持することを要求されたからです。そして、もちろん王は人形のようにじっとしているわけではなく、その滞在の期間に古い制度が廃止されたり、新しいことが決められたりして、王は精力的に統治をおこないます。要するに新しい価値と様々な変化が次々に生まれる期間であったわけです。それらは、王が臨在する以前では、なかなか変えようにも代えることのできなかったことなものでした。人民の積り積もった望みと要求が、王のみこころによって、一つ一つ実現する期間でした。また、王の目に町の隅々がすべて明らかにされてしまう期間でもありました。従って、パルーシアは、王の到着の一瞬ではなく、王の在位・臨席の一期間を示しています。

↑単語としては《バラ》「そば・傍らに」と《ウーシア》「居ること」の合成語で、「そばに居る」という意味で、正確な訳は「臨在」です。聖書が「イエス・キリストのパルーシア」を語る時、それは、「イエスが私たちと共に在る、居る、来ている」ことを意味しているのです。

## ⑮回目東京キングダムセミナー20231209

## 86 ページ初め

「パルーシア」の理解は、「再臨」を理解するうえで、最も重要な単語となります。日本語聖書で、「到来」「来臨」「再び来る」などと、訳されているところが「パルーシア」です。これまで、一瞬のうちにやって来るキリストをイメージして読んでいた数々のみことばを、本来の「パルーシア」の意味で黙想すると、そこに何がみえてくるでしょうか。←これは、みなさんどう思いますか？25：52.45

ちょっと、聖書を読んでみましょう。

- ① I コリントの 16：17、パウロが手紙の最後にいろいろ、挨拶めいたことを書いていますよね。そういうところに、よく出てきます。「ステパナとポルトナトとアカイコが来たので・・・」の「来たので」って書いてある、これが、「パルーシア」なんです。こういう時になんともなしに使う単語なんです。今日、〇〇さんが、お茶の水のセミナーに来たんですよ。」っていう時、ぱっと到着した時のことを言っているんじゃないでしょ。「来た」と言うのは、ここに座って、何時間か一緒に過ごして、または、後の交わりまで一緒にいて過ごしたということは、これは、「滞在した」ということですよ。これが、パルーシアなんです。共にいたということを言っている。28：08.26
- ② II コリント 7：6 を見て下さい。「しかし、気落ちした者を慰めて下さる神は、テトスが来たことによって、私たちが慰めて下さいました。」この「来た」は、「パルーシア」です。気落ちしていたんですよ。そこにテトスがやって来て、それによって慰めを貰ったということは、・・・ぱっと、ドアを開けて、一瞬見て、「こんにちは」と言って、ぱっとドアを閉めて帰ったら、慰められますか？（笑）ありえないでしょう。「来た」、パルーシアした」ってことは、来て何日か居て、共に食べて飲んで、語り合って、「我々は、慰めを受けた」と、言いたいわけですよ。このニュアンスが、平素使う「パルーシア」だったんです。29：25.48
- ③ そこで、このパルーシアが、I テサロニケ 4：15 に、こういうふうにも使われる。私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られる時まで、生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。この「主が再び来られる時まで」の「再び来られる」と訳しているのが、「パルーシア」です。皆さんも「再び来られる」ですか？他の訳は何と書いてありますか。「来臨」、「主は来られる」、ですね。ハイ。

この新改訳の「再び」とは、「どっから来たんですか？」と、突っ込みたいところですけど・・・、「主がパルーシアされる」ということは、ぱっと来て、その時のことだけを言っているんじゃなくて、「再び来られる時まで」と、書いてある。・・・これね、これ書かれたのは、紀元1世紀でしょ。この時に、「主が、パルーシアされるまで、生き残っている私達」という言い方、どうよ、これ。「じゃあ、主のパルーシアは、いつからなの？」と、言いたい。だけど、何のことはない、イエス様は、最後の最後に弟子たちに、「わたしは、世の終わりまで、何時もあなたがたと、共にいる。」と、言われた。あの時のあの言葉は、「パルーシア」じゃないけれど、「わたしは、世の終わりまで、何時もあなたがたと、共にいる。」と、イエス様は言われた。ですから、イエス様が、共にいなかった時はない。この初代の時からずーっと、共にいて・・・で、今、私達がこの聖書を読んでいるのは、もう、2000年後の話ですよ。←じゃあ、「パルーシア」って、なによ。でも確実に新約聖書は、これから後の時代に、「主がパルーシアされる」とも言っている・・・面白いよね。そこから何が思えてきますか？32：38.89

## ⑮回目東京キングダムセミナー20231209

④ このテサロニケ 5 章 23 節、平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエスキリストの来臨（パルーシア）のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだは完全に守られますように。・・・ここで、さっきの話ですけど、I テサロニケ 4 章の 15 節の後、16 節に主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラツパの響きのうちに、ご自身、天から下って来られます。それからキリストにある死者がまず初めによみがえり、(17 節)次に生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。←—ここでしょ。いわゆる一番重要な終末論のハイライト、そうだと思うわいな？ そう読んでこなかった？ そう聞いてこなかった？ ねえ、のように書いてあるわけよ。で、「パルーシアの時に、これが起こる」と、言っている。

でも、兎にも角にも、さっき、本の 86 ページで読んだように、「パルーシア」というのは、到着したその一瞬を言うのではなく、滞在した「一定期間」を言っているということなんです。初代の人たちは、「もう、私たちの時代からパルーシアしているんだ」と言ってるわけよ。そして、2000 年後の私たちがまた、この「パルーシア」に注目しているわけなんです。

それならば、「イエス様は、ずっと一緒にいるということなんです。」と、いうことだけれど、この「終わりの日に」、時代が進むにつれて、「パルーシア」の中に込められたものが、濃厚になっていくというのが、新約聖書の書き方なんです。 ←ポイントです。 35 : 55.27

それで、本に書きましたけれど、聖書の日本語訳では、「来臨」とか「再臨」とか書かれていますが、これは、「再び来る」とか、「到着」の意味合いがこっちは強いけれど、「臨在」と、訳す方が適切だということは、もう、これには、異論がないんです。だけれど、「来臨」「再臨」のことばをこのままにしているのです。

そこで、他の言葉も見ますよ。【2】【3】「現れ」、【4】「啓示」【5】「エルコマイ」「来る」、があります。87 ページ 【2】 ファネロオー「現れ」

ことばの説明の前に、ちょっと、ここで、コロサイ人の手紙 3 章 1-4 節を見てみましょう。

3:1 節 こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこには、キリストが、神の右に座を占めておられます。2 節 あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。3 節 あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。4 節 私たちのいのちであるキリストが 現れ（ファネロオー）ると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現れ（ファネロオー）ます。

↑これはね、「現れ（ファネロオー）」と言われている、このことばを、「終末」のことばとして、受け止められていることが、多いんです。皆さんはどう思われますか？ この 3 章の 1 節から 4 節のこのことばは、「キリストの再臨」というものに当てはめて、いいんですか？ 4 節の「キリストが現れる」ということは、「キリストがもう一度、来ることじゃないか」と、思ってしまうんだけどね、この「ファネロオー」ということばは、どちらかという、「密かな現れ」という意味でなんです。

## ⑮回目東京キングダムセミナー20231209

このもう一つ下に

【3】「現れ」「エピファネイア」ということばがあるんですけど、これと、違うんです。

こっちの「エピファネイア」ということばは、「公然とした現れ」です。なぜ、これが判るのかというと、イエス様が復活した後、弟子たちに現れますよね。あれは、一人一人に、あるいは、どちらかというと密かに、弟子たちに現れましたよね。あの時使われたのが、「ファネロー（密かな現れ）」だったんです。そして、公然と、民衆の前に姿を現わすという、イスラエルの民の前に公然と姿を現したというのが、「エピファネイア」です。

ということは、コロサイの4章1-3節で言っているのは、何ですか？

3節あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。あなたがたの思いはね、2節で、「地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。」と言っている。私たちは、キリストの中に置かれている。「キリストは、我々の中にいる」と、言っている。と、いうことは、皆さんは、このセミナーの中で、当然承知のことですよね。「相互内在」のことです。ハイ。41：44.69

そうすると、「私たちの内に在るキリストが現れる」とは、どういうことよ。いいですか、「私たちの内にあるキリストが、現れて来る」ということは、あなたの内におられるキリストが、あなたを通して、現れてくるわけでしょ。ハレルヤ！なんて凄いことでしょう。それを、我々みんな、期待できるわけです。我々の魂をとおして、「キリストは、現れる。」と、ここで言っているのは、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現れる。つまりあなたがたが神に造られた本来の栄光の姿に現れるということ。我々が、どれだけ聖化されるのか、栄光の姿に聖霊によって造り上げられていくか、その密かな現れを言っている。43：08.84

### 【3】「エピファネイア」現れ

だけど、「現れ」と言われたからには、キリストが再来して、全ての人の前にガーッと「天から下って現れる」というふうに受け取られやすい。「エピファネイア」について、Iテモテ6：14、理解しやすいように少し前から読んでみます。

Iテモテ6章11節　しかし、神の人よ。あなたは、これらのことを避け、正しさ、敬虔、信仰、愛、忍耐、柔和を熱心に求めなさい。「これらのことを避け、」と書いてあるのは、6章の前半のところ、いろいろ害悪なことを言ってます。そうではなく、これらの害悪なことを避けなさいと言った後で、12節　信仰の戦いを勇敢に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたはこのために召され、また、多くの証人たちの前で立派な告白をしました。

13節私はすべてのものを与える神と、ポンテオ・ピラトに対して素晴らしい告白をもってあかしされたキリスト・イエスの御前で、あなたに命じます。14節　私たちの主イエス・キリストの現れ（エピファネイア）の時まで、あなたは命令を守り、傷のない、非難されるところのない者でありなさい。この「現れ」が「エピファネイア」です。15節　その現れを、神はご自分の良しとする時に示して下さい。神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、16節　ただひとり死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まわれ、人間がだれひとり見たこともない、また見ることもできない方です。誉と、とこしえ王権は神のものです。アーメン。この「現れ」は、誰も否定することのできない現れ、「エピファネイア」を使っています。

これは、最後の最後に、ちゃんと公然と、みんなの前に分かるような「現れ」があるんだと、いうふうに言われています。46：25.80

## ⑮ 回目東京キングダムセミナー20231209

それから、もう一つ、

【4】「アポカリユプシス」「啓示」「覆いを取り除き、現わす」と訳されていることばを見てみましょう。

ローマ 8 章 19 節 被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現れ「アポカリユプシス」を待ち望んでいるのです。20 節それは、被造物が虚無に服したのが自分の意思ではなく服従させた方によるのであって、望みがあるからです。

この「現れ」「アポカリユプシス」は、本来「啓示」という意味なんですけれど、「現れ」と、訳している聖書も多いわけなんです。「アポカリユプシス」というのは、「覆われていたものが現れて来る」という意味なんです。新約聖書中 18 回使われ、そのうち 5 回が「再臨」に使われています。訳は、「現れ」ですが、原語そのものの意味は、「覆いを取り除き、現わす」ことで、「啓示」を明らかにすること、神の奥義を啓示し、真理を露定させることです。

「現れ」「現れ」といっているけど、みんなニュアンスが違うでしょう。この「現れ」「アポカリユプシス」は、同じ「現れ」でも、「覆いを取り除いて現わす」という意味、「啓示」なんですよ。

そして、最後のもう一つが、

【5】「エルコマイ」「来る」です。このことばは単純です。本当に、だれだれさんが「来る」と、単純に言う時は、「エルコマイ」なんです。はい、これはいっぱい使われています。49：18.82

ですから、この 5 つのことばで、「再臨」、「終末観」と言うものを形造っていきます。その中でも一番よく使われているのが、「パルーシア」です。

ということは（ホワイトボードで説明）、時代が、時の流れがこう進んで、初代のイエスの十字架があって、時は進んで行くとして、ここまで、「完成」、「再臨」と言っておきましょうか。・・・いいですか、聖書の書き方は、「始まりがあって、完成がある」という書き方を聖書はします。

それで、主が初代の時代から、「パルーシア」の中に私たちはいるんだと言って来たんだから、イエス様が「世の終わりまで私たちとともにいます。」と言ったその期間に全部イエス様はともにいるわけじゃあないですか。そしてそれが、「パルーシア」の思いとして、ずーっと、継続されてきたわけじゃあないですか。

「パルーシアの継続」52：06.49

それと、同時に、皆さん知っている通り、初代のクリスチャンたちは、「反キリスト」も、もうすでに来ているなんて、ヨハネの手紙なんか読んでると、そう言ってるじゃあないですか、「何よ、それ、2000 年後の今、反キリストが云々っていうのは分かるけれど、そんな頃から反キリストは、いたのかよ。」と、言いたい。

「じゃあ、どう考えたらいいんですか」と言いたい。

現代、今からのこの時代、「あそこから反キリストが出るんじゃあないかと、あの国じゃあないかしら」って、言っているのを聞いたことがあると思うけれど、・・・「パルーシア」はある、「反キリスト」はある、・・・と。別に、2000 年過ぎて、今どうのこうのと言われ始めたことじゃあなくて、ずーっと、あったわけよ。で、この間の 2000 年の中のごたごた暗黒の時代の戦争と争いの時代が、ずーっと続いてきたわけじゃない。今始まったこ

## ⑮回目東京キングダムセミナー20231209

とじゃあないからね。だからね、・・・さて、今聖書を読んで、「再臨」というものを、「終末」に関することごと  
ばを、ずーっとくまなく 5 種類を調べたら、たしかに、この「パルーシア」は、何というか、濃厚になっている  
る。・・・濃厚になっていくんです。

つまり、このある一定期間の「パルーシア」の期間というものを（ホワイトボードで説明中）、「私たちは生まれ  
て成熟していく」、「造り上げられていく」という、その「幅」なわけです。ですから、パルーシアと言う、「神  
が臨在する一定期間」に起こる出来事が沢山あると言っている。それが、「現れ」であったり、「啓示」であつたり、  
「完成させていく」ということなんです。

この間に、「啓示」、「現れ」、・・・色んなものが積み重なって、成熟に向かって行くのだよ。と、何度も、いつ  
てきましたように「世の終わり、終わり・・・」と、言ってないから。これは、「完成の時」と、いう意味の「終  
わり」ですから。

「神の国」って何よって言ったら、からし種のようなものだ。」「初めは目に見えない。しかし、それが、芽が  
出て苗が出て、穂が出て、実が実って、・・・」という、それが「神の国」だと言いましたよね。

つまり、私たちは、幼い者、まだ成熟していない者、霊的に幼いものだけれど、それが段々と、「パルーシアの  
期間」に色んなことを、吸収しながら成長していくのだと。ところが、毒麦も現れますよと、言っている。だから、  
「神の国」というのが、「この後のここに神の国がある」と、思っていると、「今現在のここにある神の国を失  
いますよ。」と、単純に言えば、こういうことです。57：39.80

だから、我々の内に得るべきところ、私達が成熟すべきこと、私達が変化していくべきこと、今現れて得るべき  
こと、それが今いっぱいあるのに、何でもかんでも、こっち（再臨、完成の時）に、こっちに、こっちに、と  
言っている。みんなこっちに放り込んでいる。今、我々は、何をしていたらいいのか。「ただこれを待っていれば  
いいんだよ」と、「これさえ来ればいいのよ」と、そういうことになっていく。ハイ。この間（パルーシア）には  
ね、確かに「患難」があるんですよ。「患難」と聞いて、どうのこうのって、思うじゃない。これから、どういう  
年月になるんだろうかと、そこばかりに、注目させられるけれど、そんなの、この時代だって、どんなに患  
難だったか、そしてこの中間の時代だって、どんなに患難だったかと、いうことです。みんな、それぞれの時代、  
それぞれの時代に、それが言えるわけです。

ここで、ちょっと、マタイの 24 章を読んでみましょう。24 章と言えば、あれだなと、思うじゃないですか。  
マタイ 24 章 1 節 イエスが宮を出て行かれるとき、弟子たちが近寄って来てイエスに宮の建物をさし示した。  
2 節 そこでイエスは、彼らに答えて言われた。「このすべての物に目をみはっているのでしょうか。まことに、あ  
なたがたに告げます。ここでは、石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません。」3 節 イエス  
がオリーブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話をください。いつ、そのよ  
うなことが起こるのでしょうか。・・・これ、何時そのようなことが起こるかと言うと、宮が崩されることを聞いているわ

## ⑮回目東京キングダムセミナー20231209

けよ。いつ、こんな立派な宮が破壊されるのですか・・・そして、次の質問、あなたの来られる(=パルーシア)時や世の終わり(=時代が完成する時)には、どんな前兆があるのでしょうか。」←要するに「パルーシアの完成」ですよ。あなたが臨在され、あなたがともにおられて、いろいろやって下さるその完成の時は、どんな前兆があるのでしょうか？問うているのです。4節 そこでイエスは、彼らに答えて言われた。「人に惑わされないように気をつけなさい。5節 わたしの名を名乗るものが大勢現れ、『私こそキリストだ』と言って、多くの人を惑わすでしょう。←私の名を名乗るものが大勢現れる。」と言うことは、イエス様が来るから現れるんでしょ。」という人がいるけれど、イエス様はパルーシア、「臨在」されているんです。

6章また戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気を付けて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たのではありません。7節 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。8節 しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。9節 そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに合わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。10節 また、そのときは、人々が大勢つまずき、互いに裏切り、憎み合います。11節 また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。12節 不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。13節 しかし、最後まで耐え忍ぶものは救われます。

どこそこで戦争が始まったから、あれが、〇〇戦争だ、どこどこで、戦いが始まったから、「これがハルマゲドンというものの序章ではないか」という、そんな話や噂は、これからもひっきりなしにやって来ますよ。でも、「それに心を奪われてはなりません」と、言っている。それはあるんだと、事実、何時の時代も「ハルマゲドン、ハルマゲドン」と、いつてきましたからね、一様に教会は。・・・今に始まったことじゃないんだけど、「あなたがたが見つめるものは、そこじゃあないよ」と、言っている。

さらに、「にせ預言者が現れる」、「にせキリストが現れる」、そういうのをサタンがばらまく。サタンの働きというのは、本当に、その意味で単純だよ。神様が持ってこようとするものを、サタンは、先に知るわけよ。もの凄く情報取扱いがいい。「神様、次、これやるな」と思ったら、先に造って、先に人に、ぽっと、与えちゃうんです。そうすると、人々は、本当に神が持って来る者よりも先にそれに飛びつく。それについて、痛いほど、飛びつく。それで、むごい目に合うわけです。そしたら、「なんだ、こんなもんを神が持ってくるわけないじゃあないか」と、思うでしょう。そしたら本当に神がその時をもたらしたら、みんな、もう、そっぽをむいちゃうじゃあないですか。これを、「イシュマエル現象」という。上手ですよ。1:05:04.84

それからね、この「パルーシア」ということばは、昔は、ほとんど注目されなかったんです。「再臨、キリストが来る」で、一辺倒だったのに、・・・この「パルーシア」は「臨在」ではないかと、言語の点から追及したのが、あのかの有名な、今宗教2世だなんだと騒がれている〇〇、ここに書いちゃってるんだけど、(笑)、あの人たちが、「新世界訳」という聖書の中に、このパルーシアは、「臨在」で訳しているんです。もう、1900年の初めから、ハイ。そして、キリストは、目に見えない形で、来ているんだと言った。

そして、それがそれだけで、おいておけばいいのに、「あの第1次大戦が始まるその時にキリストは来るぞ」と、言ったんです。「目に見える形で来るぞ」と言ったんです。が、来なかった。「なんだ、それは」ということで、非難を浴びたんです。でも、それで折れることなく、何回もそれを繰り返してきたんです。彼らが、「パルー



## ⑮回目東京キングダムセミナー20231209

シア」を「臨在」と言っていたがために、キリスト教会は、・・・。「パルーシア」は言語的には「臨在」なんだけれど、絶対それを真似したくない。」と、思うじゃないですか。彼らの言ってる通り訳してたまるか」ということになるじゃないですか。それだけ、気嫌いされたんです。ハイ、そういうことが、あちこち、いっぱいあります。まだほかにもあるんですよ。サタンは、「イシュマエル」を登場させることが上手ですから。 1：7：31.52

はい、それではマタイ 24 章の続きを読みますよ。

13 節 しかし、最後まで耐え忍ぶものは救われます。14 節 この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。 ←ここで、重要な言葉は、「この御国の福音は全世界に宣べ伝えられる」と言っていることです。今のこの学びの最中で、このことばは、重要です。

「イエス・キリストの福音」は知っているけど、「御国の福音」は知らない。というのじゃあ、困るんです。1：08：42.80

マタイ 24 章 15 節 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべきもの』が、聖なるところに立つのを見たならば、・・・、で、この日数は、選ばれた者のために、少なくなる。これは確かに、紀元 70 年のローマによる「エルサレム攻囲戦争」のことに、しっかり当てはまります。

それから、その後、23 節そのとき、『そら、キリストがここにいる』とか、『そこにいる』とか言うものがあったとしても、信じてはいけません。24 節にせキリスト、にせ預言者たちが現れて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せます。イエス様がここで、預言者ダニエルを取り上げていますが、ダニエル書というのは、非常に、よく読んでおくべき預言書ですよ。そこには、深いことが色々、語られているから、なぜならば、その次を読みます。

25 節さあ、わたしは、あなたがたに前もって話しました。26 節だから、たとい、『そら、荒野にいらっしゃる』と言っても、飛び出してはいけません。『そら、へやにいらっしゃると』と聞いても、信じてはいけません。27 節人の子の来る (パルーシア) のは、・・・はい、この「人の子」です。で、ここにある「来る」と言うのは、「パルーシア」です。これは、なんですか。そこまで、突っ込んでおくか、というと、・・・大まかに言います。・・・いや、ダニエル章の 7 章というところに、・・・大事なところなので、やはり、ちょっと開いてみましょう。1：10：56.27

↓ダニエル書というのは、ダニエルのいろんな幻がいっぱいあって、興味深いですね。中でも、この 7 章は、重要です。

ダニエル 7 章 12 節 残りの獣は、主権を奪われたが、いのちはその時と季節迄伸ばされた。13 節 私がまた夜の幻を見てみると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。14 節この方に主権と栄光と国が与えられ、庶民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。15 節私、ダニエルの心は、私のうちで悩み、頭に浮かんだ幻は、私を脅かした。16 節私は、傍らに立つ者のひとりに近づき、このことのすべてについて、彼に願って確かめようとした。すると彼は、私に答え、そのことの解き明かしを知らせてくれた。…そして、17 節『これら四頭の大きな獣は、地から起こる四人の王である。18 節、しかし、いと高き方の聖徒たちが、国を受け継ぎ、永遠に、その国を保って世々限りなく続く。』

## ⑮回目東京キングダムセミナー20231209

ここで、この「人の子の現れ」というものと、「いと高き方の聖徒たち」というのが、すぐ出てきて、この聖徒たちが患難に合うわけですよ。苦しみに合うわけですよ。聖徒たちを滅ぼしつくそうとする者がいるから、と言っている。

しかし、終わりの

26節「しかし、さばきが行われ、彼の主権は奪われて、彼は永遠に絶やされ、滅ぼされる。

これは、獣たちですよ。そして、27節 国と、主権と、天下の国々の権威とは、いと高き方の聖徒である民に与えられている。その御国は永遠の国。すべての主権は彼らに仕え、服従する。」と、書いてある。

さあ、これは、「初めに人の子が、天の雲に乗って来たということ」と、ダニエル7章14節に書いてある「この方に主権と栄光と国が与えられ、庶民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」という、記述と27節「聖徒たちに対するこのことばは、見事に、平衡法をなして、「人の子」というものと、「聖徒たち」というものと、対をなしているのだ。

人の子は、単数だけれど、聖徒たちは、もちろん複数、集合人格。集合名詞ですよ。先頭を切って、ひとりの「人の子」が現れる。勝利をするは、その人の子に与えた「権威、力、治める能力」、全ては、いと高き方の聖徒たちが持っているものとして、描かれているということです。

いいですか、新約聖書で、イエス様が、ご自分のことを「人の子」人の子と、言われていました。その「人の子」ということばは、「なんのこっちゃ分からない」けど、後のパウロたちは、それを理解していた。聖霊の啓示によって、「人の子」というのは、「キリストの体のこと」なんだ。「聖徒たち」のことなんだ。だから、Iコリントの手紙12章のところで、キリストの教会の3段階のステップの成熟というものに発展する。だから、「人の子」のパルーシアの時に、それが起こる。その成熟が濃厚になるということが、いえる。1:16:35.17

では、次にいくよ、いい？マタイ24章に戻って、

24章27節人の子の来る（パルーシア）のは、いなずまが東から出て、西にひらめくように、ちょうど、そのように来るのです。←これは、「いなずま」が東から出て、西にひらめくように、ちょうど、そのように「パルーシア」するんだと、言ってるわけよ。

ここが、もう一つの、「イシュマエル」と言ってもいいかも知れない。

「いなずま」ってなんですか？ここを読んだら、所謂「稲光」のことですよ。だから、「いなずま」というものがある、それは、ピカッと光って、あれは、一瞬でしょ。「ほら、パルーシアと言いながら、一瞬じゃないですか」「これ、どう理解しますか」と、言うんですが、これ、「いなずま」という言葉なんです。

## ⑮回目東京キングダムセミナー20231209

この「いなずま」ということばを、どう理解するかということが、大事なところなので、目を覚ましてきてくださいね。ルカ 11 章 36 節を見て下さい。

ルカ 11 章 36 節 もし、あなたの全身が明るくて何の暗い部分もないなら、その前進はちょうどあかりが輝いて、あなたを照らすときのように明るく輝きます。

↑この「明りが輝く」ってことば、これが、「いなずま」と同じ言葉が使われている箇所、「アストラベ」と、言うんです。で、この「輝く」というのを、一瞬のこのようにイメージすることが出来ますか。一定の期間、一瞬とは思えない「アストラベ」「いなずま」ということばですが、ギリシャ語では強烈な光なんだけど、「いなずま」と訳されてしまうところがね・・・。この古典の、この時代のギリシャ語の中で、この「いなずま」という表現、特に新約聖書で使われているこの「いなずま」と思われている表現が、旧約聖書にもあるんです。その旧約聖書にあるのは、「いなずま」というより、「稲光」というより、「明るい雲」あるいは、「雨を大量に降らせる雲」の存在。「黒雲」というような意味合いで、書かれているところがあるんです。

↓

一つ、例を挙げておきましょう。いい？今、聖書から聞こうとしているからね。邪魔くさくても、開かないと駄目よ。ゼカリヤ 10 章 1 節 後の雨の時に、主に雨を求めよ。主はいなびかりを造り、大雨を人々に与え、野の草をすべての人に下さる。この預言の中で、「いなびかり」と、皆さんの聖書では、そう訳されていますか？ところが、欄外注釈を見て下さい。それがあある人は、読んでみて下さい。参加者：「雷雲」、先生；はい、「雲」ですね。

「雷雲」、つまりね、いろいろ結論を言うと、旧約聖書で、「いなびかり」ともいうこのことばは、一瞬の光のことだけを時間的なことだけを言っているんじゃないで、一つの、「衝撃ある出来事を現わす予兆も含めた一つの期間」、その「存在期間」をいうという、ことが言える。それを、「稲光」というように解釈されて来たのを、新約古典のギリシャ語を使う人たちが、同じギリシャ語で、「アストラベ」、「いなびかり」と、それを持って来たがために、どうしても、「いなずま」ということばが、「一瞬」というイメージに捕らえられている。とらえがちになったということがいえる。稲妻が東から出て、西にひらめくというけど、いなづまって、東から出て、西に広がるって、決まっているんですか？北から南の場合もある死、西から東の場合もあって、色々でしょう。一瞬のいなづま、・・・でも、ここでは、「東から出て、西にひらめく」というのは、新たな日が昇って、新しい日差しが、天に差す、その瞬間を、その期間を、いっているとも言える。 1：23：31.97

だから、今まで、「パルーシア」ということばと、この「いなずま」という 27 節のことばが、セットになっていることに、つまづいてきたんです。今まで。だから、「パルーシア」というのは、「一瞬のことじゃあないのかな、それでもいいんじゃないのかな」という、終末期待論に拍車をかけて来たんです。

だから、マタイ 24 章 29 節、これらの日の苦難に続いてすぐに、太陽は暗くなり、月は光を放たず星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。そして、30 節そのとき、人の子のしるしが天に現れます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来る（エルコマイ）のを見るのです。ここの「雲に乗って来る」の「来る」は、「エルコマイ」を使っています。本当に「来る」ということばを使っています。1：24：30.25

## ⑮回目東京キングダムセミナー20231209

分かります？この終末のための聖書の原文を、じーっと読み比べながら行くと、我々が「終末論」として描いている絵に、もの凄く幅が生まれるということを、分かって下さい。一辺倒な決まり決まった手順で、淡々と起こって行き、「その苦しい患難も通るのか、通らないのか」と、いうこと、とか、その最終的に引き上げる瞬間はどんなだろうかと、何でもかんでも、ここに持ってこようとする。人間の習性というものに、警告を与えているのです。

で、それだけじゃあなくて、さっき、言いかけてましたけれど、「完成する」という、この時に至る、今、「パルーシア」の時代なんですよと、私たちは。このパルーシアの時代に、今、啓示され、現れ、理解され、今までにないものが、我々を今待ち構えているんですよ。

だから、あなたは、ここに起こるイエス様が、「それらは、起こるに決まっていることだけ」と、言ってる。「あれがキリストじゃあないか、預言者じゃあないか、あの戦争がそうじゃあないか、この国がこう動くんじゃないか」と、そういうことに目をとめますか、それとも「あなたが完成させられていくことに、目を留めますか？」と、「それが、分かれ目になりますよ。」と言ってるわけです。じゃあ、「完成させられていくというのは、どういうことなんですか？」ということ、後半に話しましょう。

後半：00：07.74

先程の後半の続きですが、マタイ 24 章 33 節、そのように、すべてのことを見たら、あなたがたは人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。34 節まことに、あなたがたに告げます。これらのことが全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。35 節この天地は滅び去りません。しかし、私のことばは決して滅びることがありません。36 節ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子もだれも知りません。ただ父だけが知っておられます。←神様、イエス様が、ここで含んでいる深い言い回しを考えて黙想することは、大切です。

それから、ここで重要な「パルーシア」が出てきます。37 節 人の子がパルーシアする（来る）のは、ちょうど、ノアの日のようだがからです。←この「ノアの日」っていうのは、「ノアの日」が単数でなくて複数だということに注目です。つまり「あのノアの日々のようです」という感じなんです。人の子が来る、パルーシアする時、38 節、洪水前の日々は、ノアが箱舟に入る時、その日まで、人々は、飲んだり食べたり、めとったり嫁いだりしていました。39 節そして、洪水が来てすべてのものをさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が、パルーシアする（来る）のも、そのとおりなんです。40 節そのとき、畑にふたりいると、ひとりを取られ、ひとりが残されます。41 節ふたりの女がうすを引いていると、ひとりを取られ、ひとりが残されます。2：40.08

## ⑮回目東京キングダムセミナー20231209

ここで、一つ、気が付くことがあるでしょ。「ああ、そうなんだ」と。「ノアの日々のようだ」ということは、パルーシアが起こる時は、ノアの日々のようだということは、なんですか。ここが、いい？すべての物をさらってしまふ。畑にいと、ひとりは取られ、ひとりは残されます。女がうすを引いていると、ひとりは取られ、ひとりは残されます。———なんか、ここで言う「取られる」というのは、所謂、「終局の極致」である、あのテサロニケに描かれている、「パルーシア」の時の「空中携拳」の状態だと、捉えやすい。

けど、違うでしょ。洪水でノアの日を取られたのは、誰なんですか。残されたのは、誰なんですか。残されたノアの家族、八人の方が良かったわけでしょ。「取られる」というのは、神によって、取りさられたわけじゃあないですか。03：53.34

ここをね、テサロニケで言う「空中に引き上げられていく」という絵に、合致させていくというのは、無理です。何でもかんでも、あの「空中携拳」と言われる、その構図があまりにも強烈なので、それは、聖書にそうあるからで、・・・でも、あのテサロニケのことばだって、「死んだ人については」という、ことわり書きで、彼らが、あまりにも死んだ人のことを、歎き、悲しみ、ショッキングな風体なので、その人たちについては、こう思いなさい」と、「これらのことばで、慰めを受けなさい」と、わざわざ言っているんです。そのことばの中に、隠された、一つの「構図」なんです。「絵」なんです。4：54.61

それで、「そう書いてあるから、字義どおりにそうとる」というのは、それでいいんですけど、何でもかんでも・・・。「空中携拳」とか、「キリストの地上再臨」というものは、このパルーシアの時代の一つの、「極致」なんです。「極致の一点」なんです。ここに起こる。(ホワイトボードで説明) そのように使徒たちも神ご自身も描かれたということは、事実なんですけど、だからと言って、イエス様が、「その極致だけに目をとめて、あなたがたは、恐れおののいて生きなさい。」と、言ってるかい?! 新約聖書、全部のパルーシアに関する言葉の中に、さっき言いましたけれど、「極致に至るまでの濃厚なパルーシアの時に、あなたが成るべき人になりなさい。」と、そこを言っている。

艱難時代に起こるいろんな事が、それも書いてあるじゃあないですか。で、その中の患難から、「エスケープ」して、あなたは、「逃げたらそれでいい」と言っているんじゃないんです。その中にあるけど、あなたがたはその中で、害を受けない、その中でも成熟出来る。その中でもそれを治めていける。その中で、そっから、うまくすり抜けていき、あらゆる神の守りと奇跡と、そして自分自身の成熟をそこに持ってきているんだと、

イエス様が、ユダヤの人たち、特に指導者たちにもみくちやにされて、今にも逮捕されようとする時に、聖書所の書き方は、面白いよね。「イエス様は、その中をすり抜けていかれた」と書いてある。周りに凄いことが起きるけれど、パルーシアの聖徒たちは、その中をすり抜けていけるんだと。

そして、何よりも、マルチン・ルッターが、先月の後半にカトリックから云々ということを行いましたよね。あの時のことも振り返ってみてもらおうといいんだけど、「反キリストは、バビロンだ。この今の組織は、・・・」と、ルターが気がついて、・・・テサロニケだったかな、あの文章を彼が読んでいき、「私が、この反キリストから離れるのは、・・・離れるのはいい。バビロンから我が民よ、離れよ」と言って、その次ね、ルッターが、こう言い残しているんです。「しかし、私の内なる反キリストは、どう、取り扱えればいいのか」と。これ、有名な話なんです。

## ⑮回目東京キングダムセミナー20231209

ルッターは、「ローマカトリックの教皇は、ああ、バビロンだ、我が民よ、バビロンから離れよ。」と言って、先頭を切った。でも、彼自身は、そういうところから離れることで、何か、それで全部 OK とは、思っていない。  
「大切なのは、このパルーシアの中で、我が内なる反キリストから、どう離れるか、自分の内なるバビロンから、自分の内なるものを、どうバビロンから守るのか、そこが大切なんだよ。」と、気が付いていたんです。

ですから、「あれが反キリスト」とか、「何々戦争が起こるぞ」とか、「何々の戦いが起こったぞ」と、ニュースを見て、ネットニュースを見て、いろいろ沸き立って、ああだ、こうだと、自分の外のことにピンとアンテナを張っている・・・、そんなことは、起こって当たり前なんです。それよりも何に注意すべきなんですか。このパルーシアの時代に我々に「開かれるべき啓示」「我々の内に現れて来るキリストの姿」、それに、わくわくしまししょう。「それを、しっかり見つめましょう」と。10：28.73

このセミナーのパート1のIコリントの12章の説明にもありますように、キリストの民が成長していく3つの段階をどのように踏んでいけるか、あれは、単なる「3ステップね」、と、通り過ぎていっては決していけない。だから、ここに我々、対面で、lineでも、何人か集っています。でも、我々の、自分の中にあるキリストが自分の中で、どう現れていくのか、・・・それは、あなたを通して、ですよ。それを、本気で信じて、本気で目をみはって、いったらどうなるか、そして、我々が互いにその人の中にある「キリスト」を私は見つける。覆いを取り除けられて、あなたは、こういう人なんですね、分かれば、関係が、どうなりますか？凄いいじゃないですか。  
「おちゃらけて、あるいは恥じらって、あるいは、謙遜して、いやいや、そんな、そんな、・・・」と、もう、そんなことを言ってる場合ではないかと・・・。

「あなたは、そう分かったんですね。」「あなたには、そう開かれたんですね」アーメン！「そうしたら、私はそれを受け取りましょう」「私の中でキリストは、私はこうだと、私も確認します」「信仰を使って、この目で見ます。」―――ということに、突き進んで行くんです。だから、相手の啓示が、私の啓示になり、私の啓示が、相手の啓示になっていく。それが、キリストの体の中で起こって行く。クリスチャンの付き合いの中で、起こって行くんです。

ただ一つの行事、ただ一つの活動を、「いっしょにやりましょうね」など、「ああだ、こうだ、」と、言ってるだけじゃない。それは、ある事でしょうけど、ひとり、ひとりが、キリストのかしらに結び付いた一つの体になっていくということ、それは、それとは、違うレベルです。そこを、解き放ちたいんです。

このセミナーに参加している人は、みんな自分の思いの中で、主との関係を追求してきた方だと思います。そしてそれを日々、センシティブに真剣に、考えていると思います。ですよ。その中で、自分自身に対する啓示をどう、クリアに、明らかにしていくか、自分の内なるキリストを表現していく、自分の表現の仕方というものを、・・・他の人に対してどうなんだろう」、それは、我々の身近な家族に直接かかわることだし、それを、ブレイクスルーしていくんです。今迄、「あんなもんだ」、「こんなもんでいい」、「こうするしか仕方がなかった」と、思っていたことを、自分自身の中から、それを自分で殻を破って、腹を破って、ブレイクスルーしていく。―――ということが、我々に課せられている「パルーシアの行い」なんです。

## ⑮回目東京キングダムセミナー20231209

「キリストの体」と言っても所謂、教会でした。でも、それは、一つの牧師だの伝道者だの説教師だの、「役職」というものがあつた。それは、なににもなくなればいいと言っているんじゃないんですよ。あつたは、あつたにせよ、その牧師と言われる立場に今いることが、・・・どんな牧師なのですか。その人の細かなキリストの現れは、どんな牧師なのですか。その人の細かなキリストの現れは、どんな牧師なのですか。どんな伝導者なのですか。もっと、明確に細やかに、その人がわかること、その人の中にあるキリストが、現れて来ること、啓示されていくことを、・・・。

そしたらね、私たちは肉がありますから、やっぱり、失敗もしますよ。でも、どんな肉の現れであっても失敗でも、少々なことでは、つまずきませんよ。互いに。絶対につまずかない。なぜならば、キリストにあるその人がわかっているから。だからこそ、堂々と、率直に親身に、愛を持ってその人に忠告できるようになる。で、互いに忠告を受けるようになる。 16：22.43

そうすると、我々が、互いに祈り合うという内容も、祈り方も、悪霊に対する対処の仕方も、昔と今とは、違ってくるんです。違ってきて当然なのです。そこに、ブレイクスルー、この真理の中で、パルーシアの時代に、我々は、突進して、獲得して知ることを、そのことを、宣言しましょう。

私、よく、このレベルで、知り合いの人たち、「祝福してるよ」と本当に、そのレベルで言われる。で、私も「OK,がっちり、貰いました！」と、返事します。「それ貰った！」と、もう、遠慮しません。遠慮会釈、外交辞令なし。「貰いました！」本当に貰ったと信じて、自分は一人で、活動し、生きるんじゃない、共同体の中で生きているんだと思えるから。 18：17.36

それで、・・・いい？ノアのこととかを話しましたが、先程の続きに戻りますね。

マタイ 24 章 45 節、主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には、彼らに食事をきちんと与えるような忠実な賢いしもべとは、いったい誰でしょう。47 節…その主人は彼に自分の全財産を任せるようになります。48 節ところが、それが悪いしもべで、「主人はまだまだ帰るまい」と心の中で思い、(←—これ注釈で、「まだ時間がかかる」と、書いてある。) 49 節その仲間を打ちたたき、酒飲みたちと飲んだり食べたりし始めていると、50 節・・・思いがけない日の思わぬ時間に帰ってきます。

主は、私たちに王権を預けて下さったんじゃないですか、それを、どう使うのですか、パルーシアの間にといい言っている。ここを、「なんか、神様は密かにやって来て、メツチャ厳しいですね。」と、そうイメージしてここを読む人がいる。まあ、いろんな読み方があるんでしょうけど、——それは、違いますよ。20：00.26

それから、25 章 1 節を見て下さい。天の御国は、たとえて言えば、それぞれがともしびを持って、花婿を迎える十人の娘のようです。(←有名なたとえ話。) 3 節愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を用意しておかなかった。という、毎度、皆さん、よくご存じの展開がここにあります。この、「パルーシア」、「パルーシア」と、24 章の中で展開してきた中で、25 章のこの 10 人が持っているべき「油」って、何なんでしょうね。「花婿を迎え出る 10 人の娘が、天の御国なんだ」と、・・・面白いよ。油を余分に蓄え持っていた 5 人が天の御国じゃないんだって、・・・天の御国

## ⑮回目東京キングダムセミナー20231209

って、何が起こるの？私達、パルーシアノ時代の責任がどこにあるか。「ああだ、こうだと、世の中のニュースを見て、あれがこうで、ああだ」といって、騒いでいる場合か？「自分の中の神の油に目を留て、注意しなさい。」と言っている。

その後で、13節 だから、目を覚ましていなさい。14節 天の御国はしもべたちを呼んで自分の財産を預け、自分は旅に出て行く人のようです。 マタイの有名なタラントのたとえ話が始まる。このパルーシアの時代の流れのイエス様の言いたいことが、分かるでしょう。23：24.61

マルチン・ルッター先生あの言った一言が、ホントに、心に染み渡る有名な言葉ですよね。あれはね。

「ああ、自分のタラントは、一体何なんだろうか」と、思うわけですよ。だから、「私の持っているものには、キリストの現れがある。それは、何だろう。小さいとか大きいとか、そんなのは、関係ない。今日、生きるべき、パルーシアの生き方はなんだろうか」と思ったら、まずは、それをしっかり、生きていること。24：23.31

だから、ここまで話してきた上で、言いますけれど、先月後半に話した《宗教改革》と《反宗教改革》・・・ルッターを潰せと言った、《ローマカトリックの運動》というのがありました。そのローマカトリックを、反キリストだの、バビロンだのと、言い始めたプロテスタントを放っておくと、どんなに大変なことになるかと言って、反宗教改革運動を展開したということ。その《反宗教改革》の中には、文字どおり、プロテスタントへの迫害というものがあつたわけです。戦争までになった。

ところが、もう一つ、「神学的に、ローマカトリックは、反キリストでも、バビロンでもないという証明をいかにするか」と言うことだった。それでもって、ローマ皇帝が、「その当時の世界を治める前の時代に、強力な軍隊と、支配力を持っていたアンティオコスという王というか、将軍がいて、(ローマ皇帝の仲間だとしたら、その人のせいにしても意味がないから、) あれは、ローマ帝国が出来る前の話だ」として、そいつを「反キリスト」としたわけなんです。「だから、ルッターが言うように、今の教皇は、そう(「反キリスト」)じゃあないんだよ」と、「遠い過去の時代に、過去にいたんだ」と、言ったんです。ハイ。それも、ちょっとは神学的に、効力があつたんです。だけど、それだけじゃあ収まらなかった。

それで、もう一人、イエズス会の神父フランシスコ・リベラという人が出てきて、「いやいや、反キリストやバビロンというのは、遠い将来に出て来るんだよ。」「今の教皇じゃあないよ」と言ったと、言ったよね。で、そう言ったフランシスコ・リベラという人が、結構有名になって、後に「カトリック使徒教会」という教会が出来て、その教会のエドワード・アービングという人がまねて、・・・そのエドワード・アービングが、(ホワイトボードで説明中)――→ローマ教皇がいたんだけど、これが、「反キリストでは、ありませんよ。遠い過去の時代に反キリストとはいったんですよ。」「そして、遠い将来に反キリストは出て来るんですよ。」「だから、今じゃ、ありませんよ。」と、いったわけ。で、この策が結構ヒットして、この後に、一人、二人、三人と、有名な学者が出て来るんです。

フランシスコ・リベラ、アービング、ジョン・ネルソン・ダービー、・・・このアービングは、カトリック使徒教会、有名です。カトリック使徒教会のアービング、皆さん、関心があつて調べたかったら、あれこれ検索し



## ⑮回目東京キングダムセミナー20231209

て調べてみたら分かりますよ。私はもう随分昔にやったことですが、エドワード・アービングは、1800年初頭、ダービーが1800年代同じ、イギリスやスコットランドの人です。そして、1900年代になって、スコフィールドというアメリカの神学者が出て、1900年の初めです。この1900年の初めに所謂ペンテコステ運動がおこるんです。で、ペンテコステ運動が起こる前にあのカトリック使徒教会で、聖霊の賜物、使徒、預言者、伝道者、牧師、教師の回復。ということも、もう、言っていたんです。所謂、ペンテコステ運動の前のペンテコステ運動なんです。31:03.68。

ところが、この人たちの中で引き継がれてきたのが、所謂、キリストの「終末論」だったんです。全部、この中に持って行けど。良いことも悪いことも、全部この後ろにあるんだよ。と言う訳です。で、1900年のスコフィールドさんと、ペンテコステ運動との神学とが合致して、所謂、デイスペンセーション聖書理解というものが、確立していったわけです。3141・48

デイスペンセーションの聖書理解というものは、19世紀にできたものじゃありません。もっとずっと、何百年の昔から、【対抗プロテスタント運動の中で、築き上げられてきた神学が、いつの間にか当のプロテスタントの終末理解になっちゃったということです。何という、皮肉。】

だから、ここでもね、分かるでしょ。サタンは、主が起こされる最後の完成を、どうやって、くじくか、ここに完全に【イシュマエル策】を、投入してくるんです。うまい具合に、終末に余計なものを注ぎ込んで、自分たちがパルースアの時に、本当になすべきことに注目しないように。

教会が、すべてここに注目していく、この神の民の姿に。いい？この世も、教会の半分も、嫌になっちゃうんです。「なんだ、あいつら・・・」と、「本気でそういうことを言ってるのか」と、もう、「終末の絵」と言ったら、X。「もう、知らない」という、・・・それね、この世のクリスチャン、キリスト教の半分以上は、そうなんですよ。34:23.10 ホワイトボードで説明———↓ 34:23.00

しっかり、こっちへ放り投げていく、集中していく、デイスペンセーションな考え方というのは、その中のほんの一部です。でもね、その中でクリスチャンになったり、・・・そこで暮らしていたら、それがもう、全てなんです。ただ我々は、聖書の原文をしっかりとみて、幅のあるものの中から、神のことばに即して、しっかりと、読んでいかないといけない。35:13.26

ですから、「正しい、そう書いてあるから、字義通り読んだらそうだから」と、いうのは否定しません。それはそれでいいんです。けど、その中に含まれている神の心の奥義を我々は、同じ聖書から、汲み取って、その書かれてある絵を、字義通りに受け止めなければなりません。ここが、今、確かめられている、追求されている、求められているところです。分かりますでしょうか。今日は、非常にセンセーショナルなことを言っちゃいました。言っちゃいましたよ。(笑) 聞いちゃいましたか(笑)

だからね、どうぞ、皆さん、こうなんだって、こうだって、言っていたわよ。」と、簡単に人に触れ回らないでください。このキングダムセミナーの初めから、終わりまでの話の中で、これを喋っている貴重な言葉ですから。ここだけ切り取ってね、ああ、キングダムセミナーで、あのひと、こんなこと言っていたー！」というのが、話

## ⑮回目東京キングダムセミナー20231209

が、ポン、ポン、ポンと行くと、もう、手に負えませんよ。そうじゃあ、ありませんか。この流れの中で、しっかり私は、言いたいこと、言うべきことを言っているつもりです。今迄のセミナーの中で、ここまで言ってきました。けど、今だから言えるのです。ここまで、一緒に学んで下さった皆さんにだから、言えるのです。

あのね、さっき、「字義通り」が、どうのこうのと言いましょね。(ホワイトボードで説明)

最後に「永遠の神の世界」「人間の世界」。神と人間は向き合い、神様は、人の中にご自身の息を吹き込み、生ける者とし、人の魂が神の動きと同じように成長して、パートナーとして生きることを望んだ。けれど、人間の理性も認識も知恵も、じゃあ、神の世界と、全く一緒かという、そうではないでしょ。ここは、所謂4次元の世界、以上の世界です。こっちは、我々は、3次元の世界です。この間には、越えがたい隔りがある。そうでしょ。神の無限の世界、永遠の世界じゃあないですか。人間から見れば、そうでしょ。無限であり、永遠である世界。こっちは、有限じゃあないですか。全てわからない、この、神の永遠の無限の世界、測りがたい天地を造られる神の世界と人間の世界がどうやって、通じ合うんですか。 39 : 37.56

神様は、この時に、ここに、一つの絵をお与えになる。あるいは、イメージをお与えになる。この「絵とかイメージ」というものは、勝手に作り出した「嘘の作り話だ」と、言うんじゃないですよ。なぜならば、それは、確認しようがないけれど、神様が、これを与えたんですよ。神がこれを与えたんです。そうしたら、人間は神の世界を知るためにこの神が描いた絵を見るわけです。人間は、これ目です。(笑)

これを見るわけです。これを見て、読んで聞いて、その時に、この絵というイメージを通して、人間は、神の世界を、知るわけです。分かるのです。

所謂この「絵」というのは、神の世界から、有限の人間の世界に伝えるための「シンボル」なんです。これ。この「絵」を人間が、まじまじ見て、考えた時に、神の世界というものが自分に理解できる、分かって来る、注いでくる。という、このルートを造られたんです。

この「シンボル」、「絵」、「イメージ」というのが、何ですか、聖書です。バイブルです。神のことばです。これが神のことばで、私達が聖書を読む、聖書のことばを耳にする。そうした時に、このイメージを通して、神の世界を知るのです。ですから、この絵というものの書いてあるとおりの字義的な解釈というのが、狂っちゃあだめなんです。

だから、聖書に書いてある、順番、文字、一点一画、それを大事にして、書いてあるとおりのものを保持しなければならいんです。そうでなかったら、神の世界のこのシンボルが嘘になってしまうでしょう。だから、聖書の字義的解釈というのは、必要なんです。「空中携拳」「キリストの地上再臨」それから、「千年王国」確かに、そう書いてあるから、字義的に受け取るべきなんです。・・・べきなんですけど、

字義的解釈をした上で、これを、よーく、咀嚼した中で、神の世界から来る、「能力」、(←ここ、聖霊ね、ホーリースピリット)、———「神の世界から来る神の「知恵」と「人格」と「能力」は、私たちの内、にこの絵が示している「神の世界」を、ここに、【実現していく】のだと、ここに【聖霊が、神の世界を、我々のものとしていく】のだと。【体験さしてくれる】のだと、言うことなのです。 44 : 45.63

## ⑮回目東京キングダムセミナー20231209

ですから、こうなった時に、初めに、字義的に解釈してきた聖書の世界を、聖霊が、もう一回、この通りなんだけど、この書かれたものの中に含まれている神の世界を、ここに豊かにしてくれて、私たちは、この豊かな心の中から、もう一度、これを見るわけですよ。見たら、また、繰り返されるんです。45：30.58

ここで、神の世界がこっちに来たって言うけど、それで、いっぺんに完了するものか、ここが、じわじわじわ、パルーシアの時代に、年月をかけて、成長、成熟していくという、プロセスがあるわけです。

神の国の大きくなっていく、プロセスがここにあるわけです。それによって、少しずつ神の世界の奥義が、この人間の世界に、実現し、分かってくるんです。46：10.18

だから、「字義的に聖書を解釈していきましょう」と、言うのは、正しいことを言ってるんですよ。それはそれで。でも、そこで、留まるから、問題なんです。だから、聖書を字義通りに思える、読むことは、大切なことなんです。それを、ないがしろにしては、駄目なの。47：13.43

これまで、聖書のエデンの園というか、創世記1章、2章、3章と、やりましたけれど、あの時に聖書の中に書いてある字義的な言語をたどりながら、このイメージを見てきたわけです。見てるわけじゃあないですか。で、その中から言える神の世界を我々は、聖霊とともにキャッチしていくんです。それと同じように、終末のこれから起こる云々というこの時代のこともこの絵を通して、聖霊とともに何が今、逃してはいけない大切なものなのかを掴んでいきましょう。そして自分のものとしていきましょう。

さっき、休憩の時間にえらく盛り上がり、喋っていた方があったんですけど、「神様って、やっぱりこれ、永遠の局地を描くのがお好きですよ。」と。「創世記の初めって何よ。永遠の初めの極致でしょ。そして、永遠の終わりの極致もちゃんと書いている。」「だから、それを見た人は、「わー、そうなんだ。」「そうなるんだ」「そこに行きたいわ」と、思うじゃあないですか、でも、そう思うけど、大切なのは「今」なんですよ。」と。

神は永遠のお方、無限のお方だけど、私たちは、「今」というこの「永遠の今」にいるんです。それを、この時にどう、受け止めるかなんです。神様は、極致を描きながら、いつも、それに目を開いて、見つめているあなたの今という、この時、その場を問うておられる。49：41.91

明日は、来月は、来年は、そんなの関係ない。今日という時にこの絵を見たあなたは、どうするのか、その今日という日にあなたが、この神のことばを聞いて、見て、あなたは、どう決めるのか、そして、どう行動するのか、どう決心するのか、というのを、聞いて、問うておられる。

ここまで話して来て、だからこそね、話せる。いい？「神の国とは何かを、聖書が何と言っているのか」ということが分かってなかったら、こういう話、出来ないでしょ。

さあ、今日は、キングダムセミナーの中でも、最高に腕を組んでしまう時だったのでしょうか。(笑)・・・と、言いながらね、もの凄いすごい質問をするんですよ。良く分かっている、よく開かれている質問もされるんですよ。さあ、皆さん、コメント、何か、ありますか？ 録音されていたら、コメントもできないですか？(笑)